



MINATO TOKYO

Bulletin

みなと
ユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/MITSUKO TAKAI PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03 (3434) 2233 発行人/高井光子

2015年6月1日発行 第140号

目次

P1 巻頭言「価値観の多様性と共生」	P9 ディプロマツツ・レクチャー
P2 - 8 シンポジウム 「成熟都市へのみち」 ～オリンピック・パラリンピックを超えて～	P9 2015年度 総会
	P10 事務局便り / 編集後記

価値観の多様化と共生

ユネスコ協会 理事 峰尾茂克



厚生労働省が平成 26 年 7 月に発表した平成 25 年簡易生命表によると、男性の平均寿命は 80.21 年、女性は 86.61 年。90 歳まで生存する割合は、男性は 23.1%、女性は 47.2%となっている。

また、内閣府の平成 26 年版高齢社会白書によると、我が国の総人口は平成 25 (2013) 年 10 月 1 日現在、1 億 2,730 万人。総人口に占める 65 歳以上人口の割合 (高齢化率) は過去最高の 25.1% (前年 24.1%) となっている。

上記資料からも明らかなおり日本は超高齢社会である。

一方において、総務省『国勢調査』によると、年齢別未婚率 (2010 年) は、男性は 25 歳～29 歳で 71.8%、30 歳～34 歳で 47.3%、35 歳～39 歳で 35.6%。

女性は 25 歳～29 歳で 60.3%、30 歳～34 歳で 34.5%、35 歳～39 歳で 23.1%となっている。

このように、25 歳から 39 歳の未婚率は、男女ともに上昇傾向になっている。

今後の少子化の懸念や世代間扶養の考え方に成り立つ年金制度への懸念、生産年齢人口減少への懸念等は、今後の日本の課題として、よく知ら

れたことである。

見方を変え、価値観の多様化という点に言及すれば、今後日本は超高齢社会ならではの世代間における価値観の相違やライフスタイルの変化による価値観の多様化に益々直面する時代になることが予想される。

価値観が多様化し、他の価値観を認めることは、国際交流にも通ずるところがある。他の価値観を認めるということは決して他に迎合することではなく、自己の存在を確立した上で、他を認めることではないかと私は思う。つまり共生である。

日本には今まで引き継がれてきた古き良き伝統や文化がある。私は最近日本の良き伝統や文化が価値観の多様化や時代の変革とともに失われつつあるような気がしてならない。人と人との交流についても然りである。

2020 年にオリンピック・パラリンピックが開催される。現在、円安の効果もあり日本への海外からの旅行者が増えているという。

思えば、速いもので、私がユース活動委員会で活動していた時から 25 年ほどが経過した。

日本の良き伝統や文化を真の意味で海外の方に伝えていくことができるかどうかを改めて自問自答してみたいと思う。

テーマ **成熟都市へのみち**
～オリンピック・パラリンピックを超えて～

日時：2015 年 2 月 28 日（土）14：00～16：00

会場：「みなとパーク芝浦」1 階 リーブラホール 【JR 田町駅・芝浦口（東口）下車徒歩 5 分】

パネリスト 中村良夫氏 東京工業大学名誉教授 工学博士（景観工学・地域計画学）
安田雅俊氏 港区教育委員会事務局次長 港区役所 元街づくり支援部長
芥川麻実子氏 道の駅八王子滝山駅長
コーディネーター 永野博 港ユネスコ協会副会長

開会挨拶 高井光子会長： 50 年前の東京オリンピックは、敗戦後 20 年の日本発展の起爆剤だった。2020 年は、理想的な「成熟都市」へ向かう契機となって欲しい。世界の平和の下に、希望を持って、こころ豊かに、幸せに暮らせる、安全で、魅力ある、「成熟都市・東京」についてご教示いただけることを楽しみにしている。

小池眞喜夫 港区教育長ご挨拶： 港ユネスコ協会には、国際理解のための講演会、世界の食文化紹介、日本の伝統文化紹介、留学生とのコースフォーラムなど、国際交流、相互理解などを進めるための活動等を通して、港区に大きな力を与えていただいている。

港区は大勢の方が働き、集い、学ぶ国際都市である。81 の大使館があり、多くの国際機関、外国籍の多くの企業が存在し、日々大勢の人々が学問、観光、ビジネスなどで訪れる。ホテルの客室数は都内で最多であり、飛行機の羽田空港、船の東京港、鉄道の新幹線など交通ネットワークの要であり、またテレビ局などの情報発信の拠点でもある。

港区は 2020 年のオリンピック・パラリンピック開催では、中心的な地域となる。2020 年を機にさらに防災対策や行政の多言語化などを進めている。港区に住み、働き、学び、訪れる人々に安心していただけるような、区民が誇りとなるような地域となるよう取り組んでいる。

本日のシンポジウムでは港区にとっても有益なお話を伺えるものと考えている。港ユネスコ協会のご活躍に大いに期待している。



《シンポジウム》

コーディネーター 永野博副会長

港区は 2020 年には大事な役割を担う地にあるので、区民がこういう問題について考えることは大切だと思う。教育長のお話を伺い、このテーマでシンポジウムを開く大切さを再認識した。

基調講演者 中村良夫氏 東京大学工学部卒業後、日本道路公団技師、東京大学助教授、東京工業大学教授、京都大学大学院教授を歴任。手掛けられた主な設計は、東京ゲートブリッジ、羽田エスプラナード、太田川基町護岸、古河総合公園（メリーナ・メルクーリ国際賞）など。
著書：風景学入門。風景学実践編。土木空間の造形。都市をつくる風景一場所と身体をつなぐもの。
他多数

基調講演 要約

成熟都市 いろいろな意味の取り方がある。いわゆる国際化・少子高齢化時代における都市という意味がある。

他に、東京や西洋の大都市の骨格は19世紀中頃に出来た。都市になくなくてはならない装置としてのデパート、ホテル、劇場、公園など。骨格やそれらの装置が、時代と共に、少しずつ変わり、徐々に成熟の時代に向けて進んでいるという意味もあると思う。

公園 ロンドン、パリ、ニューヨークなどの公園は19世紀中頃が原点であり、それ以前には大緑地はなかった。しかし、日本には、昔から神社仏閣という立派な公園のようなものが存在した。これらは実に立派な庭園であり、その中には盛り場のようなものがあるという類いまれな装置が備わっていた。

古い時代の東京は、どういう原理で。都市が成り立っていたか

東京の最も面白い部分は都心、つまり今の港区と呼ばれるあたりにあるのではないかと思う。

図を示して説明したい。



①図 この浮世絵「寄る辺としての富士と江戸湾」には、遠くには富士山があり、前面には江戸湾と隅田川が描かれている。

江戸の町について、我々が誇りに思うのは、**町が山と海に抱かれている**ということ。山水占地の考え方、つまり、自分の住んでいる場所がどういう所にあるかを大事に考えるということ。これは日本人の自然愛好と関係があると思われる。

太田道灌が初めて江戸城に入った時に、「我が庵は 松原つづく 海近く 富士の高嶺を のきばにぞ見る」と歌ったように、富士山と海が主題である。あの頃は今の皇居前広場のところまで入江になっていて、松原があつてきれいだったという。こういう自然の中にどういふ城を作るかが最大の関心であり、見どころであった。

②図 小さいところに目を移してみよう。これは「広尾川の谷」という有名な画像である。鬱蒼とした木々に覆われたお庭のような場所に、今でいうカフェテラスがあり、崖の上には、ぎっしりと家が立て込んでいる。あの時代から、大都市の真ん中であつて自然の気配の濃い所が、人々の好きな場所であつた。

当時は、「公園」という言葉はなく「**名所**」と呼んでいた。こういう都市の縁（汎郊外都市）と、山水と、盛り場性の溶け合った近世都市名所がいたるところに在った。こういう感じの所は、大切に守っていかなければいけない。

③写真 現在の広尾の有栖川公園 江戸時代に伊達屋敷があつた所で、現在でも谷奥の気配が残っている。港区が持つ内陸部の魅力の一つである。これだけの大都市の中心地であつて、今も深い山と水が残っている。現代へ引き継がれた**地相遺産**であると思う。（地形のことを昔は地相と呼んでいた。）

④写真 江戸時代からの「**谷間のまちニワ**」 地相の襷にあたる谷間に、賑やかな町民の町・下町があつて、坂を上ると静かな山の手と呼ばれる屋敷町がある。この下町は今も麻布十番の町の中心地であり、その賑やかなところに戦災復興広場が作られた。小さな広場であるが、その周辺にコーヒー店などがある。その中でゆっくりと座ってコーヒーを飲みながら綺麗な広場を眺められるところが面白い。ここは都市計画の歴史では有名な公園である。

このように、地形にそつて楽しい町や美しい自然があるというのが面白い。特に麻布や六本木辺りの地形が非常に複雑である。武蔵野台地は高い所でも海面より数十メートルであり、その境目がとても入り組んでいて、地形の襷には江戸時代の人々の生活が残っている。

江戸時代から続いている古い庭園が谷の底にあつて、周りに、今、近代的な建物が建っている。そのコントラストが非常に面白い。

六本木ヒルズについては、街づくりの面から、いろいろな意見や批判もある。しかし一つのディベロッパーが、一つの大きな土地を堀で囲んで、その中にマチを作るという伝統は、日本には昔からあつたわけで、これも「**境内型**」と呼ばばいいのではないか。

京都の妙心寺や大徳寺などは巨大な空間を壁で囲んで、僧侶達が済む塔頭などがたくさんあつて、一つの町を作っている。これと同じ型ではないか。**道路が作る「町並み型」**とは趣を異にしている。

成熟時代の都市を考える時には、都市の成り立ちをもう一度思いおこし、地形をなるべく保存しながら、うまく活かして街づくりをしてはどうかと考える。

未来都市 最近大きく発展しているのは、レインボーブリッジがかかっている**お台場のある海浜部**の地域。ここを、どのようにしていくかは、今後の大きな問題である。今の人気スポットであるお台場やお台場海浜公園は「**新しい東京**」を代表する風景であり、夜景も美しい。しかし、あの地に建つ新しい商業施設は、生まれてから20年近く経

っているが、果たして商業的に上手くいっているのだろうか。将来、あれでいいのだろうか。

公園という近代都市施設を考える上で、周りをどのようにアレンジしていくかは、今後のイメージを決める上で、大きなウエイトを占める問題である。

昔から、日本の都市には水辺に、**都市の縁側**というようなものを作って楽しむという伝統があった。京都の「鴨川の納涼床」や、「王子数寄屋河辺の宴席」と呼ばれるような、水辺対面型宴席が知られている。

これらは、公園という性質ではなく、歡樂的な町と自然の風流が一緒になっている名所であり、西洋の公園にはない発想である。「**まちニワ**」と呼ばれば良いと思う。こういう形のもをこれからも作っていけばいいのではないかとと思う。こういう伝統をどのように近代化したものにするかが一つの課題になろう。

新しい都市の縁側として、お台場のデッキを、水辺テラスとして、上手く機能させていけないだろうか。

成熟都市の中にあるお台場公園として、今のものをもう少し工夫して、もっと楽しい場所として、東京を代表するような景色に出来ないだろうか。

商業のあり方も考えたいものだ。同じ商業施設ならば、コミュニティの形成というような、社会性を持った緑地を上手く作って行ったらいいと思う。

かつて、日本の農村地帯には、**入会地**というものが存在していて、村人が集まって、草を刈ったり、キノコを採ったり、魚を獲ったりなど共同作業をしたり、祭を行ったりしていた。西洋にも同じようなものがあり、**コモンズ**と呼んでいた。

これからの日本の緑地は、**都市コモンズ**とあって、都市の入会地のようなものにして行ったらいいのではないかと、私は問題提起したい。

パネリスト 安田雅俊氏 港区教育委員会事務局次長
港区役所 元保健福祉部長、元街づくり支援部長



港区 今の区の形になってから、平成28年(2016年)に70周年を迎える。現在の港区は芝地区、麻布地区、赤坂地区、高輪地区、芝浦港南地区の5つの地域行政を執行するエリアに分かれている。

私が所属する教育委員会は、学校教育だけでなく、生涯学習やスポーツなども担当範囲である。

教育委員会は、首長から権限を分ける形で、区長といえども教育委員会の仕事には軽々に口を出せないことになっている。

成熟都市と規制緩和 都市というものは常に成長し続けるものであり、一つの高みに達するとそれで終わるというものではなく、無限の機能更新が求められている。つまり**都市づくりの「すべては過程だ」**といえよう。

東京の建築制度は、**建築基準法**や、**都市計画法**、**都市公園法**などで規制されているが、近年、シンガポール、上海、ドバイなど東京に匹敵する都市が出現し、それらの都市へ、会社機能が流失している現状に政府が危機感を覚え、都市計画に関する制度の規制を緩和するために**都市再生緊急整備地域**が指定された。

都市の公園再生 街づくり支援部長の時に関わった一つの例として、ある公園の話を披露させていただく。港区がいかに緑を守り、緑を作り、緑を増やしていくことに努めているかを、ご理解いただければ幸いである。

都市再生緊急整備地域内の虎の門にあるホテル・オークラは、日本を代表する、ホスピタリティを体現しているホテルである。しかし、都市計画公園エリア内、つまり、必ず公園にしなければならないという宿命をもつ土地の中にホテルが建っているのである。港区には他にも、都市計画公園と指定されている「都立芝公園」の中にも、宗教法人が所有する増上寺があり、西武が持つ東京プリンスホテルやプリンスパークタワーが建っている。

ホテル・オークラは(株)ホテル・オークラが所有する土地に建っている。その私有地のうち、1.33ヘクタールの部分が昭和32年に、港区立都市計画公園「霊南坂公園」として指定された。

今から数年前、そのホテル・オークラの建替計画がもちあがった。ホテルの立地する土地は私有地であっても都市計画公園エリアなので、法律によって、自分の思うように自由に建物を作ることはできないという厳しい規制がある。

区としては、都市計画公園の中といえども日本を代表するホテルを排除すべきではないと考えた。また、このエリアには緑が少なく、無味乾燥の地にはいけないとも考えた。

そこで、ホテル・オークラの責任者と交渉するにあたって、港区のビジョンを示した。目標としたのは、現状よりも広大な緑地を確保すること、歩いて楽しく、環境に優れ、防災に役立つ、安全な空間を確保することであった。

そして、その公園の管理は、税金を使わずにオークラ側に委ねることであった。さらに、もし大震災が襲った時には、ホテルに**防災機能**を担ってもらふこと。こういう協定を結ぶことで、ホテルに制約を課すことにした。

協議は成立し、ホテル・オークラは今年 2015 年本館の工事に着工し、2019 年のラグビーのワールドカップ、2020 年のオリンピック開催に間に合うようにして、高層棟と中層棟が建つことになった。

街づくりは永続的なものであるから、「肉を切らせて骨を断つ」というか、向こうに少し余禄を与えるが、いつか必ず根本的な公共目的は実現するという形で街をつくるという時間軸が必要。このようにして、緑を守り、作り、増やしていく。

港区が行う都市計画の方法は、あまりマスコミにのることはなく、ディベロッパーの名前がよく実績として出る。例えば、毛利公園を再現した六本木ヒルズ、桜の名所アークヒルズなど。しかし、その裏には、港区が「緑の確保のための戦い」をディベロッパーとくり広げているということを知っていただければ幸いである。

都市政策

都市とは何だろうか。都市は人にとってどのような役割を担うべきだろうか。

都市を担う主体は「人」、「法人も含めての人」が都市を経営・運営しているのである。

一方、人を動かす**原動力は、喜怒哀楽の感情**である。

過去 20 年間に 2 度の大きな災害を経験した私たちは、都市に課せられた重要な役割を改めて認識した。

都市で生きている人々が、五感を刺激され、「よし、頑張ろう」というような克己心が誘発されるような、人の心に働きかけ、心を掻き立てるような都市。人々の再生、復活、活性化をはかるための都市。そのための装置、システムを人々に用意するような都市政策を日々考える必要がある。仕掛けを用意するには、資金やハード面、ソフト面など公共だけではできないことがあるので、社会的責任のある法人に負うところが多々ある。

日本が首都と位置付ける TOKYO。その中核としての港区だからこそ、2020 年を前に、都市政策のキーワードとして「**無限の都市機能の更新**」ということを掲げたい。

緑であれ、施設であれ、文化であれ、そこで住む人、働く人、訪れる人が心躍るような仕掛けを都市の中につくること。これこそが、成熟都市になるための装置であり、工夫であると思っている。

パネリスト 芥川麻実子氏 道の駅八王子滝山駅長
財団法人・首都高速道路協会評議員

道の駅 北海道を除いて高速道路には、15km ごとにパーキングエリアがあり、50km ごとにサービスエリアが作られている。しかし、高速道路を下りてから観光地に行くまでの途中に、何もなくて困っている。だから、無料休憩所を作ってはどうかということで 1993 年から始まったのが、**観光地型・道の駅**である。

道の駅は、自治体が国土交通省に申請して登録を受ける。自治体が土地・建物を所有し、第三セクターにより運営を行うことが一般的といえるが、運営を全て民間に委託する指定管理者制度をとる道の駅が増えてきている。八王子滝山も指定管理者制度。

2007 年に東京初の「道の駅八王子滝山」が出来たことにより、すべての都道府県に道の駅が存在することになった。現時点で登録数は 1040 駅で、観光地へ行く途中に多い。多いのは岐阜、山口、栃木など。

国土交通省が定めた道の駅には、下記の 3 つの条件が求められている。



- ① 休憩場所（24時間使えること）。無料駐車場、無料トイレ、公衆電話を備えること。
- ② 情報発信。地域、近隣、交通などの提示。方法は各駅に任されるが、八王子滝山では、大型パネルでいろいろな情報を表示している。
- ③ 地域連携を図ること。地域の物産の販売等を通じて、訪れる人々と地域の交流を図ること。八王子滝山では、農産物・加工品の直売所と八王子の文化を紹介している。

ハード面は自治体が受け持つ。しかし、運営管理は自治体が第三セクターを作って、**指定管理者制度**を使って、任せるといった形を取っているところが大変多い。道の駅は、初めは町おこしを大きな柱と位置付けられていた。しかし実際は、運営管理は民間に丸投げしている形が増えている。

私は、この指定管理者制度によって八王子市に運営を委託されている会社から依頼されて、引き受けている駅長である。任務としては、道の駅を通して八王子市全体の地域振興のために、八王子市の様々な組織や団体とを結ぶパイプとしての役割が大きい。

都市型道の駅・八王子滝山 道の駅は、昭和34年に八王子に併合された地域にあり、高速道路のインターチェンジからは近いが、インフラの整備が遅れていた。

八王子は、江戸時代には宿場町として栄え、交通の要衝であった。また、絹織物、養蚕業で栄えた町（桑都といわれた）なので、農家が多い。大学が周辺を含めて23もある。ニュータウンがあるので、都心に通う人が多い。

こういう土地柄の八王子の町をまとめるのは大変なことであるといえる。

道の駅に「ファーム滝山」がオープンされ、地産地消を推進している。スーパーとは異なる非日常的空間として、現在この直売所が大変繁盛している。地域の人と物を紹介し、人と会える場所、皆が遊びに来る場所として、とても活性化している。お蔭様で、現時点で唯一の都市型道の駅として成功していると評価されている。皆様のお越しをお待ちしている。

《パネルトーク》

永野コーディネーター

このテーマを決めた理由は、前の1964年のオリンピック時には東京が大変貌する機会であったように、2020年のオリンピック・パラリンピックを、何か積極的な意味で、変わるきっかけにしたい。それは成熟社会、成熟都市へ向けてではないだろうか、我われは考えたからである。

残り時間が少なくなったが、ディスカッションの柱として、①大都市東京のこれからの発展のかたち ②都市型道の駅から与えられるヒントは何か ③港区の場合は？ ④求められるイノベーションと、その担い手は？ の4つを考えている。

それらについて、あるいは、初めのお話しの補足でも結構なので、パネリストの皆さんからご意見をいただきたい。



中村良夫氏

私が興味を持っていることが2つある。

一つは、**人と自然との関係**、あるいは、**人と地形（地相）との関係**

昔から日本人は土地の形や自然に大きな関心を持っていて、山とか、自然への信仰的態度を持っていた。港区は大変面白い地形、台地の形を持っている。この特長を持つ面白さをもう一度認識して欲しい。

公園という大きな緑地はもちろん大事だが、古い町を歩いていると、民家の庭から、鬱蒼とした木々や美しい花々が見えて、たいへんに趣きがある。こういうものも含めて、全体が庭園みたいなものだと思う。

日本人は自然が作ったものと、人工的なものをはっきり区別しないという長い文化的、歴史的伝統がある。都市についても、自然と人工的なものが融合したと考えて行けばいいと思う。

二つ目は、**人と人との関係** 先ほどお台場の話をしたが、現在、商業の問題一つとっても、ただ売ればよいという時代は終わった。商業施設でも、そこに行くだけで面白い、楽しいという**創造・社交型**とでもいうようなものに移行しなければならない。先ほどの芥川さんの八王子の道の駅の話の中にあっただように、商業施設といえども、そこにはいわゆる言い難い楽しい場所であるようにしなければいけない。滞在時間が長ければ、人はモノを買う。それが成績を



上げる。お台場のような大きなところに、道の駅のようなものを導入するのは簡単ではないが、やろうと思えばできるはずだ。

日本の都市に欠けているものがあるとすれば、それは一種の**サロンの**ものだと思う。コーヒー店もだんだんチェーン店が多くなり、最近、ホテルのロビーも面白くなってきた。プロ的な目で見ると、都市にベンチが少なくなっているし、プラット・フォームなどでも座るところが無くなっている。

都市の面白さ、品格というものは、そこにいっただけで楽しい、ぼんやりと会話するのが楽しい、人と人との出会いを楽しめるような、ゆったりとした場所があるかどうかではないだろうか。

安田さんのお話にあったように、都市というのは喜怒哀楽の世界であり、人間と人間の付き合いが十全に発揮できるような、ビジネスとは離れた、ゆったりとした場所があるべきであり、そういうサロンの性格を持つ都市を模索するのが、「成熟へのみち」ではないかと思う。

芥川麻実子氏

八王子の「絹の道」は有名で、絹織物が相模の国・横浜へ運ばれ、ジャパンシルクとして戦前、たいへん持てはやされた。また、「炭の道」もあり、村で出来た炭を浅川から舟に乗せ、多摩川を経て浜離宮の方へ出て、大奥に運ばれた。道はとても大事だと、あらためて思う。

永野副会長

先ほど話に出たホテル・オークラのロビーはゆったりしていて、よく利用させてもらった。

地形の面白さが分かるには、歩かないといけない。港区は坂が多くて、きついなと感じるところもあるが。

安田雅俊氏

街づくりとどのようにかわるかについて、私がこだわりたいのは、「**敗者をつくらない街**」を作るにはどうすればよいかということである。在勤者と在住者、日本人と外国人、などこれまであった対立概念をなくすこと。

港区はいろいろな交差点である。住宅地にもビジネス・ビルが建ち、ビジネス街にも高層マンションが建って、高速道路が走っている。

ビジネスマンが快適だと思うことと住民が快適だと思うことは、同じであるわけで、ビジネス街に快適なものを作れば、人も快適に住めるのだと思う。そういう街を作っていきたいと思う。

《会場との意見交換》

A氏

我々が成熟都市に求めるのは、自然があり、文化、人が楽しく集まる場所であること、そういう都市を作っていくことであると伺った。高度成長期に建てたが、もはや必要でないものを整理していくことだとも伺った。

2020年のオリンピックが決まった今、東京はたいへん大きく動いていると感じる。最近、東京のいたる所で建築ラッシュが起こっている。パネリストの方がおっしゃっているような方向、風の通う、楽しい人の集まる都市を作るといのように動いているとは全く思えない。



安田雅俊氏

街づくりには制度的に問題がいろいろあり、港区だけでできることには限界がある。例えば都がやろうとすること、区がやろうとすることの方向性に違いがあることがある。面積の大きい所は都の権限にあり、地元自治体の声を反映できないことがある。少なくとも港区エリア内で行われる都市計画開発は、面積が大きくても、今後は、港区が権限を持つようにしなければならないと思う。

中村良夫氏

港区は全体的に海の方に寄っている。防災上からいけば不安がないわけではない。また、水上交通の問題についても考えていただきたい。東京の下町全体、特に墨田区や深川辺りには古い運河が沢山あるのに使われていない。これらをどうするかは、港区などが率先して考えてもらいたい。水上交通を上手く機能させることは技術的には可能だが、お金がかかる。運河の周りにきれいな遊歩道などを作っているが、建物がすべて後ろを向いているのでは面白い都市にならない。

都市は建築を含めた形で作らなければならないが、建築は民間のものであるから、なかなか手が出ない。しかし、その壁をのり越えられるかどうか。難しい問題だが、一つの成熟都市への関門である。

マンション型の共同住宅でも、自然との共生は、技術的に可能だと思う。そういうモデルを港区から出してもらえば、日本中に福音となるのではないかと思う。

B 氏

八王子の道の駅を何度か訪れたが、楽しい所だと思った。地方に旅に出ると、シャッター商店街をよく見かける。住む人が生き生きと活性化していなければ、旅人が訪れても楽しめない。

C 氏

故郷に、田舎型の道の駅がある。地元の物産を販売したり、文化の交流の場として、地域のコミュニケーションの場となっている。

D 氏

2020年のオリンピック・パラリンピックの開催が決まり、港区はその中核となる。今後ますます大勢の外国人が訪れると思う。だから、外国人と地域社会と交流できるような、ホランディアなどのソフトのインフラをもっと、整えていくことが必要であると思う。

世界中から大勢の人が集まる大きな都市になると、そこにはいろいろな人が入ってくることになる。海外ともネットワークを組んで、都市の安全を守るように十分に整えて欲しいと思う。

コーディネーター挨拶 永野博副会長

今日のテーマに関心を持って、来場してもらえらるだろうかと不安があった。しかし、こういう問題を取り上げることは大事だと再認識している。パネリストの先生方、会場の皆様、ご協力有難うございました。

閉会挨拶 松本洋副会長



「成熟都市へのみち」について、オリンピック・パラリンピック開催を機に考えてみたいと企画した。成熟都市というのは成熟社会という言葉が基になっていると思う。

成熟都市とは、経済インフラだけでなく、社会インフラをも考慮した街づくりをして、住み心地の良い、快適な街をつくること、日本流に言えば、ゆとりのある、快適性を備えたということ。コンフォタブルな都市ということであろうと、先生方のお話を伺いながら学んだ。この新装なったリーブラホールで、永野副会長のコーディネーターによって、中村先生、安田先生、芥川先生に、熱く語っていただけましたことに感謝申し上げます、また、参加者の皆様にもお礼申し上げます。

近代的な様々な形の高層ビルが建ち並び、お台場のある海浜部はまるで宇宙を思わせる空間が広がる東京、港区。しかも、江戸時代からの伝統、遺産がそこ・ここに残り、顔をのぞかせている。その奥深さ、魅力をあらためて教えていただきました。

世界のモデルになるような、良き成熟都市。5年後のオリンピック・パラリンピックを機に、住みやすく、働きやすく、楽しく、安全で、ゆったりと品格のある庭園都市にむけて、進化して欲しいと期待が膨らみ、100年後、400年後の港区はどうなっているのかなと夢みました。

たいへんに充実した内容のシンポジウムに感謝いたしております。

担当委員会：国際学術文化委員会

まとめ：高井光子（会長）

写真：坂下妥子

Diplomats Lecture (ディプロマッツ・レクチャー)

テーマ：“Japan’s Foreign Policy : Present Situation, its Risks and Potentiality”

講師：東郷和彦教授 京都産業大学 世界問題研究所長
元 オランダ全権大使



日時：2015年3月3日(火)午後3時00分～4時30分
会場：国際文化会館（港区六本木）講堂
対象：駐日各国大使および大使館員 使用言語：英語（通訳なし）

創立以来、年1度開催している「ディプロマッツ・レクチャー」。今回は3月3日、講師に東郷和彦大使をお迎えして開催しました。大使6名を含む外交官30名余のご参加をいただきました。

講師の東郷和彦大使は、現在京都産業大学教授世界問題研究所長をつとめられ、港ユネスコ協会の理事でもあられます。



外務省勤務が長く、オランダ大使を歴任されておられますので、在京の外国大使の皆様にはたいへんお顔が広くて、開始前から、にこやかか、あたたかい雰囲気が漂っていました。

また、スライドを使って要点を示しながら日本外交の現実について、とりわけ直面する

課題について熱弁を振るわれました。

スピーチ後の質疑応答の時間には、次々と質問が出ました。質問者の中にはかつて東郷大使の薫陶を受けた外交官もおられて、教え子の活躍を喜ぶ教育者としての一面もお見せになりました。閉会後も、大使に話しかけられる参加者が次々と押し寄せられました。



担当：国際学術文化委員会 報告：常任理事 宮下ゆかり 写真：坂下妥子

2015年度総会 無事終了

日時：2015年4月28日(水) 19:00～20:00
場所：港区立生涯学習センター305号室

永野博副会長の司会で始まり、高井光子会長から挨拶がありました。「34年前の創立以来、国際都市・港区にふさわしい、港区ならではの活動を心がけ、また、ユネスコ憲章に謳われている、『世界上のすべての人々の平和と幸福を実現する』という理念に沿った活動を求め、重ねてまいりました。これは会員の皆様のお力のもとより、区長様はじめ、教育委員会様からのご協力ご指導があったからこそだと存じます。オリンピック・パラリンピックの中核となる港区。当協会にも、国際交流、国際理解を深め、豊かな文化を育む更なる活動が求められましょう。区長様はじめ、各方面の方がたに、一層のご支援・ご協力をお願い申し上げます。」



武井雅昭港区長が開会時からご出席下さり、ご挨拶をいただきました。

「2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、港区もトライアスロン競技が行われることから、会場となる台場の整備を進めてゆき、併せて区内の案内板等も外国語対応をすることを含め、海外からの来訪者におもてなしの心をもって対応できるようにすること等のインフラの整備を進めていきたい。港ユネスコ協会のご協力も大いに期待している。」との、あたたかいご挨拶を頂きました。

高井会長が議長に選出されて議事が粛々と進められ、2014年度の事業報告、決算報告、監査報告、また2015年度の事業計画、予算が承認されました。

役員人事は改選時ではないので、大きな動きはないものの、前ユネスコ特命全権大使で現在内閣官房参与の木曾功さんに相談役になっていただいた旨の報告がされました。松本洋副会長が力強く、閉会の挨拶をされました。

港区教育委員会・生涯学習推進課から新任の竹藤朋子係長と、同じく新任の担当者である寺崎周子さんが出席されました。会員の出席者25名を含め、30名の方に出席いただきました。 事務局 須田康司

事務局便り

【ようこそ 新入会員】 個人会員： 柏木 亮さん

【今後の事業予定】 (詳細は別途、チラシやホームページでご案内します)

☆4月15日～8月5日 英会話初級クラス、毎水曜日、18:30～20:30、コース全14回

講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター

☆6月6日(土) 12:00～15:30 世界の味文化紹介「アルバニアの家庭料理」

会場：みなとパーク芝浦 2F 港区立男女平等参画センター「リーブラ料理室」

講師：レコ・ディダ先生(駐日アルバニア共和国大使館全権特命大使夫人)

参加費 会員：1400円 一般：1900円

☆6月9日(火) 18:30～21:00 MUA 新入会員を囲む会 会場：港区立生涯学習センター303号室

☆6月26日(金) 18:30～20:30 第1回国際理解講演会 会場：港区立生涯学習センター305号室

テーマ：「戦後70年 歴史和解への道」 講師：松尾文夫氏(ジャーナリスト)

☆7月4日(土) 13:30～16:00 ゆかた着付け体験教室

会場：港区立赤坂区民センター第1和室 参加費 500円

☆7月14日(火) 18:30～20:30 MUA サロン 話者：田部 揆一郎氏 会場：MUA 事務局

【ご寄贈品】 ご協力ありがとうございました。

* 「ミンダナオ子ども図書館」への衣料品など。

寄贈者(敬称略) 奥村和子、葛西章江、鈴木明美、高井光子

寄贈品は常時受け付けています。事務局までお願いします。【衣料品(除毛織物) 新品・中古品(洗濯済)】

【ご協力のお願い】 ネパール地震の被災者支援のための募金活動を始めます。

募金は、日本ユネスコ協会連盟を通して、下記の支援先へ送金されます。

ネパール世界寺子屋運動で支援しているカトマンズ地域の4つの寺子屋の学習者や、その地域の人々

募金の送金先・港ユネスコ協会 みずほ銀行芝支店：普通0921421

・港ユネスコ協会 コーアクション口：郵便振込口座 00190-4-73732

港ユネスコ協会事務局 (火～金 10:30～17:30)

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp ウェブサイト：http://minato-unesco.jp

■編集後記■

◆ ユネスコ諮問機関イコモスが「明治日本の産業革命遺産」について、世界遺産への登録をユネスコ側に勧告しました。これについて隣国では「かつて朝鮮半島の人々が強制徴用された歴史を美化している」と批判が起きました。「世界遺産への登録」を機会に、そういう事実を直視してより正しい歴史認識がなされると思います。(坂下妥子)

◆ 最近『英語でブッダ』なる本に出会った。仏教の教えを英語で学ぶ方が分かりやすいことも多いそうだ。例えば『諸行無常』は『Everything is changing.』とある。なるほどと納得すると共に何やら不思議な感覚でもあった。素養として学ぶには良い方法かも知れないと感じた次第である。(須田康司)

◆ 今春、米国で1990年に「障害を持つアメリカ人法」(ADAと略される)が成立するまでの経緯を伝えるドキュメンタリー映画「Lives worth living」を見る機会があった。社会の蔑み、無理解という厚い壁に向かって、連帯を組み、あらゆる手を尽くして自分達の当然の権利を求める気迫に感動した。(棚橋征一)

◆ 私の戦争の記録・抜粋。1943年10月、父は召集令を受けて、満州へ。母、姉(6)、私(3)、弟(1)は和歌山の祖父母のもとに移り、同居。空襲。敗戦後のシベリア抑留中に父は病没。2006年5月、父の最期の地ロシアのオレンブルグ市へ個人旅行。2009年、厚労省が同市に日本人死亡者慰霊碑を建立。(高井光子)